

第 14 回研究情報交換会（1 月 11 日（金））開催のご案内 テーマ「持続可能な社会におけるプラスチックのつくり方・つかい方」

つくばサイエンス・アカデミー（SAT）では研究テーマを決め、異分野交流による「知の触発」を意識した研究情報交換会を開催しています。研究情報交換会では、テーマに関連して複数の研究者に講演をお願いし、その後、異分野の参加者を含む方々との自由討論を行います。

この度下記の要領で第 14 回研究情報交換会（懇親会も含む。懇親会は有料 1,000 円/人）を開催します。会員、非会員に関わらず参加可能です。皆様の参加をお待ちします。

参加募集要領：

- ・参加募集人員 20 名
- ・参加費は無料。但し、懇親会費は 1,000 円/人を当日徴収します。
- ・参加希望の方は、メールで申し込み先 academy@epochal.or.jp まで、「第 14 回研究情報交換会参加」と記載し、①氏名、②所属機関、部署、③専門分野、④連絡先（電話番号、e-mail）、⑤懇親会参加希望の有無を連絡ください。

記

1. 日時： 2019 年 1 月 11 日（金） 午後 5 時から 8 時 30 分

2. 場所： つくば国際会議場 4 階 サロンレオ会議室

3. テーマ： 「持続可能な社会におけるプラスチックのつくり方・つかい方」

（趣旨） プラスチックに関しては、軽量、高品質、廉価など多くの特徴があり、生活になくてはならないものとなっています。2015年のプラスチック生産量は4.7億トン、リサイクル率はわずか14~18%と推定され、他方廃プラスチックの発生量は世界で3.2億トンといわれ、海に流出する量も最大推定量は年間1,200万トンに及ぶといえます（OECD）。また廃プラスチックなどの主要な輸入国であった中国では自国の環境上の利益と国民の健康を守るために廃棄物輸入を停止する政策に転換しました。このような中で持続可能な社会を築いていくためにはプラスチックのリサイクルについて今後どうしていくかについて考えていくことが必要です。またつかい方ばかりではなく、プラスチックのつくり方についても、石油由来ではないバイオマテリアルベースからのプラスチックなども検討され、さらにプラスチック代替材料への道を探っていくことも考えられます。

本研究情報交換会では、持続可能な社会におけるプラスチックをつかう立場、プラスチックをつくる立場および国際標準化の立場から話題を提供していただき、プラス

チックの今後の在り方について参加者と意見交換をしていきます。

4. プログラム：

・開会挨拶

・講演 【午後5時～6時10分：各講演（講演 20分+質疑5分） 国岡氏（講演15分）】

○産総研 環境管理研究部門 資源精製科学研究グループ 上級主任研究員 加茂 徹氏
「SDGsが目指す持続可能な社会におけるプラスチックの使い方」

○産総研 触媒化学融合研究センター 官能基変換チーム 研究チーム長 富永健一氏
「バイオマスベースプラスチック開発の現在と将来」

○産総研 イノベーション推進本部 知的財産・標準化推進部 審議役 国岡正雄氏
「環境に関わるプラスチックのISO国際標準化」

・フリーディスカッション 【午後6時10分～7時30分】

・閉会挨拶

・懇親会 【午後7時30分から8時30分】

5. 講演者の講演概要

○産総研 環境管理研究部門 資源精製科学研究グループ 上級主任研究員 加茂 徹氏
「SDGsが目指す持続可能な社会におけるプラスチックの使い方」

概要) 資源やエネルギーが無限であることを前提とした20世紀型の社会では、工業製品の価値は主に品質や価格で判断されてきた。しかしSDGsが目指す持続可能な社会では、工業製品の価値を評価する基準として新たに環境と倫理が加わる。本講演では、これまでのプラスチックリサイクルの概要と問題点を述べると共に、新しい価値基準に基づいた21世紀型のプラスチックの使い方を考える。

○産総研 触媒化学融合研究センター 官能基変換チーム 研究チーム長 富永健一氏
「バイオマスベースプラスチック開発の現在と将来」

概要) 再生可能資源であるバイオマスからのプラスチック合成としては、化学変換によるものとバイオ変換によるものが存在する。前者の一例として、リグノセルロースより触媒反応を通じて直接合成されるレブリン酸を基幹物質としたリファイナリー技術を紹介する。また後者の一例として、SIP第2期が取り組むスマートバイオ産業・農業基盤技術が目指しているものについて紹介する。いずれも「強み」と「弱み」があり、それぞれの「強み」を組み合わせることが重要である。

○産総研 イノベーション推進本部 知的財産・標準化推進部 審議役 国岡正雄氏
「環境に関わるプラスチックのISO国際標準化」

概要) ISO(国際標準化機構)/TC61「プラスチック」専門委員会における生分解性やバイオベースの計算方法、マイクロプラスチック、リサイクルに関する議論について、生分解性の作業グループの議長している立場から説明します。今年のTC61の国際年次会議がさいたま市(参加者310名(23カ国、うち日本人120名))で開催されましたので、その内容(ヨーロッパから活発に提案が続いている海中での生分解評価法やマイクロプラスチックの定義、リサイクルの作業グループ新設など)も紹介します。